



TITLE:

マルクスの絶対地代に就て

AUTHOR(S):

八木, 芳之助

CITATION:

八木, 芳之助. マルクスの絶対地代に就て. 経済論叢 1925, 20(5): 906-915

ISSUE DATE:

1925-05-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128274>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號五第 卷十二第

行發日一月五年四十正大

論叢

- 失業者統計概説……………法學博士 財部 靜治
- 課税と時の元素……………法學博士 神戸 正雄
- 我國近世の土地問題……………經濟學博士 本庄 榮治郎
- 御家人の特質……………文學博士 三浦 周行

說苑

- 朝鮮の雜種農業……………法學博士 河田 嗣郎
- 保險の本質に就て……………法學士 小島 昌太郎
- アダム・スミスの於ける勞働價值法則の妥當性に就て……………經濟學士 森 耕二郎
- マルクスの絶對地代に就て……………經濟學士 八木 芳之助

雜錄

- 金利に關する一研究……………經濟學士 蜷川 虎三

法令

輸出組合法・重要輸出品工業組合法・染料製造獎勵ニ關スル法律・外國人土地法・預金部預金法・大藏省預金部特別會計法・大藏省預金部特別會計規則・預金部資金運用規則・日本銀行ノ手形割引ニ因ル損失ノ補償ニ關スル法律・教育改善及農村振興基金特別會計法

マルクスの絶對地代に就て

八木芳之助

マルクス地代論の主なる内容を成すものは、リカアドの差益地代説の修正擴充と、リカアドの差益地代説には認められて居らぬ絶對地代の論證とである。差益地代に關しては、マルクスの説く所、リカアドよりも更に詳細複雑ではあるが、併し大體其の本質に於ては、リカアドの所説と異なるものではない。従てマルクスの地代論中に於て最も興味あるは、彼の絶對地代論である。マルクスのリカアドに對する攻撃は、リカアドが勞働價值説から出發しながら、其の推究を徹底せしめず、纔に土地生産力の差異に基く差益地代を認めたるに止まり、此の差異を離れても、猶存在すべき絶對地代の成立を認めなかつた點に加へられてゐる。マルクスの此の攻撃は果して正當なるであらうか。又マルクスの主張する如く、果して價值法則から差益地代以外に絶對地代が演繹せらるゝであらうか。以下少しく此等の點に關し論及するであらう。

—

マルクスに依れば餘剩價值の最古の形態は、農産物を產出するに要する勞働の報酬を越ゆる當該農産物の餘剩、即ち地代として表現せられてゐる。此の際地主は、此の餘剩價值たる地代を生産者から直接掠奪するものであつて、それは直接生産者をして、一週の何箇日かを地主の所有地に

於て無償の勞働に服せしむることあり、又時間的、空間的にかく明白に餘剩勞働を區分することなく、勞働生産物の一定部分を現物にて要求することあり、或は法律上地主に歸屬する土地の用に對して貨幣にて支拂を要求することがある。斯の如く經濟發達の各階程に應じて、勞働地代、現物地代及び貨幣地代が發生するものであるが、地代が其の何れの形態に於て現はるゝを問はず、地代が餘剩價值の主要形態をなすは、資本主義的生産發生前にことに屬する。²⁾

之に反して利潤は、資本主義的生産發生以前の何れの時代に於ても、純然たる附隨的のものとして現はるゝに過ぎない。何となれば農業生産部面に於て利潤が發生するや否やは、直接生産者が地主に地代を支拂へる後、必須的生活資料以外に尙一の餘剩を産出し得るか否かの事情に基くからである。此の際地代は、概念上利潤を汲收するものであつて、利潤が現實に發生する場合に於ては、それは地代の背後に於て生成し、地代の大きさの上に、自己の自然的限界を有するものである。³⁾

地代と利潤との此の關係は、今や資本主義的生産方法が出現し、農業にも普及するに及んで、全くその地位を顛倒するに至るものである。即ち利潤は餘剩價值の主要形態となり、地代は資本主義的小作農業者が直接に勞働者から掠奪せる全餘剩價值中から地主に交附する、餘剩價值の一部分となり終るものである。

乍併地代がかく變形することは、決して資本主義的生産以前に於ける利潤の如く、科學的に充分説明するを得ざる偶發的のものとなり終るものではない。寧ろ反對に、近世資本主義的形態に

2) Marx, Das Kapital. Bd. III. 2. S. 323--336.

3) Marx, Das Kapital. III. 2. S. 326, 330, 332, 334.

於ける地代は、理論的討究の價值ある對象たるものである。先づ資本主義的地代に於ては、資本主義以前の地代の如く、そが他人の不拂勞働の生産物の搾取に基くことが、しかく明白に現はれてゐないから、地代を餘剩價值の觀念の下に概括することは、正に理論家の任務となるに至つた。従て土地所有なるものは抑々如何にして、資本に依て産出され、且つ直接既に占有されたる餘剩價值の一部をば、更に資本の手より奪取し遂ぐるかを、資本主義的生産の立場から研究することが必要となるに至つた。

併しマルクスの考ふる所によれば、斯く問題を提議すると雖も、デール、バッシー等が重農學派に倚賴して主張せるが如く、地代の發生を以て、農業勞働の生産力が直接生産者を支持する以上の食料品を生産するとの事實より演繹する要はない。勿論右の事實は、餘剩價值産出の自然的根柢を形成するものなりと雖も、此の意義に解釋せる農業勞働の生産力を指示することは、地代が餘剩價值と同一視せらるゝものたる限り、地代の説明として役立ち得るものである。併し地代が既に久しく餘剩價值の特殊なる一形態として、又餘剩價值の特殊なる一部分として發達せる時に際し、尙餘剩勞働、隨て餘剩價值一般の自然條件に關する極めて原始的な概念を反覆することによつて、地代を説明し得ないのである。然るに之を以て地代に關し斬新なる意見を提示し得るものと信するならば、それは既に過去の一定經濟發達階段に於てこそ斬新であり、正當であつたものを、それが既に陳腐となり、虚偽となつた時代にも、尙かゝる概念を反覆することは俗學經濟學の特徵たるものである。かくて俗學經濟學は正統經濟學が研究せる諸問題に就ては、夢にも想

ひ及ばなかつたことを自認することになるのである。⁵⁾

さて資本主義的經濟事情を考慮して、マルクスに先きだつて、地代論を立てたる正統經濟學者中にて最も卓越せるものは、云ふまでもなくリカアドである。地代を以て特殊形態の餘剩價值、即ち利潤を越ゆる餘剩なりと解する點に於てマルクスはリカアドと其の見解を一にしてゐる。併しマルクスはリカアドの地代論を決して其の儘採用せるものではない。否マルクスの地代論は其の著書餘剩價值論に於ては、リカアドに對する論争の形式に於て、更に資本論に於ては一層圓滑なる論争の形式を以て記述せられてゐる。今リカアド地代論に對するマルクスの主なる批難を擧ぐれば、リカアドは(一)差益地代と併んで絶對地代の存在することを看過せること。(二)各土地の沃度の差異並に逐次的投下資本の生産力の差異から發生する兩形態の地代を充分明確に區別せなかつたこと。(三)任意的制限(土地生産物の價格騰貴、優等地から劣等地への耕作の擴張)の下に於ける地代法則を充分に研究せなかつたことの三點である。⁶⁾

今本論文に於てはマルクスの絶對地代に就て論ずるを本旨とするを以て、主として問題となるは右の第一點である。

二

マルクスの考ふる所によれば、リカアドは商品の價值と其の生産價格との兩概念を明確に區別せざりしを以て、絶對地代に到達せなかつたのである。マルクスによれば商品の價值と生産價格とを同一視する以上、リカアドが絶對地代の發生を否認せるは正當と謂はざるを得ない。何とな

5) Marx, a. a. O. S. 319.

6) Borthiewicz, Die Rodbertus'sche Grundrententheorie und Marx'sche Lehre von der absolute Grundrente. Zweiter Artikel. (Archiv für Die Geschichte des Sozialismus und Der Arbeiterbewegung. Erster Band. Leipzig. 1911.) S. 391—394.

* 茲に商品の價值といふは、マルクスの資本論第一卷にいふ商品價值の概念にして、之が生産のため必要とさるゝ社會的勞働の分量によつて決定さるゝものを謂ふ。

れば商品の價值と生産價格とを同一視する前提の下に於て、若しも農産物の正常價格が、平均利潤以外に尙餘分に地代たるべき過剩利潤を與ふるものとするならば、農産物の正常價格が、其の生産價格以上に立つと云ふことは重複語たるであらう。蓋し生産價格は生産に前拂ひされたる資本(不變資本及び可變資本)と平均利潤との和に外ならない。農産物の價格がその生産價格を越ゆることによつて、必然、過剩利潤を生ずるであらうが、此の際、生産價格は價值に等しいと假定せるを以て、農産物の價格は價值以上に上るであらう。同時に農産物以外の總ての生産物は、その價值以下で販賣せらるゝものなることを是認するに外ならざるものであつて、即ち價值は一般に理論上概念せらるゝ所と、異なるものたることを前提とするものである。即ち同一量の労働は、農業に於ては工業に於けるよりも、より高い價值を生ずるに至るであらう。從て商品の價值は、商品に包含せらるゝ労働量によつて決定せられざるに至り、經濟學の全根柢は破壊さるゝに至るであらう。從てリカードが絶對地代は存在せないと結論せるは正當である。併し唯差益地代の存在のみが可能である。即ち最劣等地に於て産出せらるゝ農産物の價格は、他の凡ての商品に於けると同様に、其の生産價格(此の場合生産價格は價值に等しいと前提せらるゝ)に等しいのである。此の最劣等地に投下せらるゝ資本は、工業に投下せらるゝ資本から、特殊なる投資として、種類上區別せらるゝに過ぎない。從て茲に於て、價值法則の共通性が現はれる。而して優等地に生ずる差益地代(此の際唯一の地代であるが)は、各生産部面に於て同一の市場價值が行はるゝため、平均的生產條件以上のより優越せる條件の下に働らく資本に生ずる過剩利潤に外ならざ

* 生産價格とは費用價格(商品の生産に前拂ひされたる不變資本及び可變資本)に平均利潤を加へたるものをいふ。換言すれば種々なる生産部門の種々なる利潤率の平均を採り、そして此の平均をば種々なる生産部門の費用價格に附加することによつて成立する價格をいふ。

るものであつて、單に農業に於ては其の自然的根柢たる土地のため、確保せらるゝものであつて、資本家の代りに、地主の手中に入り來たるものに外ならない。⁷⁾ されば農産物の價值が生産價格に等しいとし、而して農産物が生産價格(正常價格)以上に販賣せられぬとすれば、リカアドの所謂差益地代以外に如何なる形態の地代も存在し得ないと言はざるを得ない。

茲に注意すべきはリカアドが説く所の價值概念は、所謂相對的の價值概念であつて、彼はマルクスの所謂價値の現象形態たる交換價値を説明するに止まることである。リカアドは、かゝる交換價値の實質を爲す絶對的價値の存在を明確に意識せなかつたのであつて、其の結果、彼は價值範疇と價格(生産價格)範疇とを混同してゐたのである。即ち彼の價值論は價格論たりしものである。而して彼は農産物なるものは、正常價格(生産價格)を以て販賣せらるゝとの前提の下に於て、單に差益地代のみを認めしに止まることは寧ろ當然の歸結と云ふべきである。

マルクスのいふ所によれば、リカアドは勿論、商品の相對的價値は、生産に入込む固定資本並に勞賃に支出せらるゝ資本の異なる比率によつて決定せらるゝことを認めてゐる。然し彼は同時に、此の相對的價値は競争によつて平均せらるゝ事實をも認めてゐる。彼が茲に問題としてゐる此の相對的價値は單なる生産價格に過ぎざるものである。彼は價值と生産價格とは異なるものたることに思ひ付かなかつたのである。彼は此の兩者を同一視せるものである。資本の有機的組成が異なる場合には、價值と生産價格との一致は存せざるを以て、彼は此の兩者の一致は直接に競争によつて、行はるゝ事實であると考へたのである。従て彼は農産物の價值は何故に生産價

格に平均せないのであるかの點を疑問とせなかつたのである。彼は寧ろ農産物の價值は生産價格に平均すると假定せるものであつて、此の見解からして地代を考察してゐる。⁸⁾

反之價值と生産價格とを充分明確に區別するに及んで、初めて絶對地代の發生が説明せらるゝものである。何となれば絶對地代は農産物の生産價格を越ゆる價值の過剰に外ならないからである。今商品の價值と其の生産價格とを區別するならば、商品は必然左の三種類に分類せらるゝであらう。即ち第一種類の商品に於ては、價值は生産價格に等しく、第二種類の商品に於ては、價值は生産價格以下であり、第三種類の商品に於ては、價值は生産價格以上に立つものである。而して農産物の價格が絶對地代を生ずるとの事情は、農産物なるものは、其の價值が生産價格以上に立つ第三種類の商品に屬することを證するに外ならない。⁹⁾ 何となれば右三種の商品中、第一種類の商品に於ては、商品固有の全餘剩價值は、全部生産價格中に實現せらるゝを以て、單に平均利潤を生ずるに止まり、地代に轉化すべき過剰利潤を生ずる餘地がない。更に第二種類の商品に於ては、其の價格中に實現せらるゝ、餘剩價值は、商品固有の餘剩價值よりも大なるを以て、此の場合も商品固有の餘剩價值中より平均利潤以上の過剰利潤を產出せざるは勿論である。第三種類の商品に於ては、商品固有の餘剩價值が平均利潤を越ゆるを以て、初めて絶對地代發生の可能を與ふるものである。¹⁰⁾

以上論ずる所によつて明かなるが如く、絶對地代の發生を説明せんがために、先づ起り來たる第一の問題は、何故に農産物の價值は其の生産價格を越ゆるかの點、言葉を換へて云へば、種々

8) Marx, Theorien über den Mehrwert II 1 S. 523.

9) Marx, Theorien über den Mehrwert II 2 S. 13. 14.

10) Marx, Theorien über den Mehrwert II 1. S. 196. 197.

異なる生産部面に於ける等量の資本は、如何にして異なる大きさの剰餘價值を産出するか、何故農業剰餘價值は平均利潤よりも大であるかの點である。此の問題は地代分析に關する全困難を含んでゐる。即ちマルクスによれば此の困難は、平均利潤を越ゆる農業利潤の過剰を説明することに存するのであつて、それは農業生産部に部ける剰餘價值を説明することではなく、寧ろ農業生産部面に固有の過剰的剰餘價值を説明することに存し、隨つて純生産物を説明することではなく、寧ろ他の産業部面の純生産物を越ゆる農業の純生産物の超過を説明することに存するのである。¹¹⁾マルクスは此の地代分析上の困難を解くに、資本の有機的組成の理論を以てしてゐる。剰餘價值の大きさに影響を及ぼすものは、労働及び機械(原料は全然之に参加せない)なりとするロオドベルツスに反して、マルクスは剰餘價值を全然可變資本の影響の下に置いてゐる。即ち不變資本に對立する労働のみが、剰餘價值の大きさに影響を及ぼすものである。ロオドベルツスに於ける剰餘價值率の公式 $\frac{II}{V+C-原料價值}$ は、マルクスに於ては $\frac{II}{V+C}$ に轉化されてゐる。ロオドベルツスの利潤率の公式は、マルクスに於けると同様に $\frac{II}{V+C}$ であるが、ロオドベルツスに於ては、農業は原料價值を缺くを以て、利潤率と剰餘價值率とは一致する所であつて、即ち $\frac{II}{V+C-原料價值}$ である。此の兩者の一致は、吾々が農業に原料價值を加へ、かくて農業利潤率 $\frac{II}{V+C}$ が剰餘價值率 $\frac{II}{V+C-原料價值}$ から相違を來たす場合に、除去せらるゝ所である。マルクスはロオドベルツスの利潤率の公式を採用し、剰餘價值率の公式を $\frac{II}{V+C}$ に轉化した。今剰餘價值率を百パーセントとすればマルクスの資本組成の公式は左の如くである。

(一) 工業資本 $90C + 10V + 10m = 110(-10)$

(二) 平均的資本 $80C + 20V + 20m = 120$

(三) 農業資本 $70C + 30V + 30m = 130(+10)$

此の公式よりして今や同一條件の下に於て、等量の資本(一〇〇)が異なる大さの利潤を生ずることが明らかである。¹²⁾ 農業に於ては工業に於けるよりも、資本組成上、可變資本の割合大なるを以て、より多くの餘剩價值を産出する。今や競争は各種の生産部面に於て生ずる種々異なる餘剩價值を平均利潤に均等ならしむるものなるが、茲に農業超過利潤たる絶對地代の可能が存してゐる。

さてマルクスによれば、資本の有機的組成は、一定の生産部面に於ける生産力發達程度に對する指標である。即ち生産力が發達すると同時に、資本組成の高度化、即ち不變資本に對する可變資本の相對的減少が顯著になり來たるものである。¹³⁾ されば一定の生産部面に於ける資本が、社會的平均資本に比して、其の有機的組成がより低いと云ふ事實は、此の特殊生産部面に於ける社會的勞働の生産力が、平均的標準に達してゐないと云ふことを表示するに過ぎない。¹⁴⁾ 従て農業の超過利潤は、工業に比して農業生産力の比較的僅少なる發達に歸すべきである。併乍らマルクスは茲に問題となれる農業資本の性質を歴史的に説明せんとするに在つて、農業生産夫自體の本質から演繹せんとするものではない。農業資本の相對的低位なる組成(ロオドベルツスに於ては農業原料價值の缺如によりて條件づけられてゐる)を一定不變なりと解するロオドベルツスに對し

12) Philipp Spitz, Das Problem der allgemeinen Grundrente bei Ricardo, Robertus und Marx. II (Jahrbucher für Nationalökonomie und Statistik III. Folge 51 Band 1916) 5. 614.
13) Marx, Das Kapital III 1. S. 230.
14) Marx, Das Kapital III 2. S. 292.

て、正に反對的立場にあるものと謂ふべきである。マルクスは單に原料價値の缺如によつて、農業資本の有機的組成の低位なることを絶對的に演繹せんとするロオドベルツスに對し、之を不合理、架空的のものとして批難せる所である。¹⁵⁾ 反之マルクスによれば資本主義的生産の行はるゝ一國、例へば英國に於て、農業資本の組成が社會的平均資本の組成よりも低位たるか否かは、演繹的には證明せられ得ないのであつて、唯統計的にのみ證明し得る所である。¹⁶⁾ されば時代の經過に伴ひ、農業資本が、農業の技術的進歩に隨つて、工業資本と同一組成に達する可能は、充分之を認めし所である。従てマルクスは工業及び農業間の資本組成が、平均する結果として絶對地代消滅の可能性を明白に認むる所である。彼の謂ふ所によれば、ロオドベルツスに於る地代は、その原料價値のため、永久的性質(少くとも資本主義生産の期間)を帶びてゐる。然るに余に於ては、地代は、資本の有機的組成に於る歴史的差異に基くものであつて、然かも此差異は一部分平均せらるゝものであり、否農業の發達に伴ひ全然消滅し得るものである。勿論此場合と雖も、差異が土地の自然的沃度に存する限り、假令絶對地代は消滅に歸するも、差益地代は殘存するであらう。¹⁷⁾ 更に曰く、此資本の有機的組成に於る差異は、歴史的のものであり、従て消滅し得るものである。絶對地代の存在を可能なりと示す推論は、同様に此地代の作用、存在は農業の一定發達階段に特存なる歴史的事實であつて、一層發達せる階段に於ては消滅し得るものなることを示すものである。¹⁸⁾ されば農業資本の相對的低位なる發達を前提とする絶對地代は、毫も一般的妥當性を要求し得ないのであつて、此前提が消滅すれば、絶對地代も亦消滅に歸するものである。¹⁹⁾ (未完)

15) Marx, Theorien über den Mehrwert II 1. S. 226. 257.

16) Marx, Das Kapital III 2. S. 293.

17) Marx, Theorien über den Mehrwert II 1. S. 275.

18) Marx, a. a. O. II 2. S. 15.

19) Marx, Das Kapital III 2. S. 293.